

29【P2】Ⅱ-262

平安時代の医療・医心方について

○塩原 仁子¹, 富岡 貢¹, 伊田 喜光¹ (1 昭和大学薬学部)

中国医学は5世紀頃日本に伝えられたといわれる。7世紀初め聖徳太子が隋の煬帝に書簡を送り、遣隋使、遣唐使が相次ぎ中国に渡り、多くの中国医薬書が我が国に伝えられた。又中国から日本に渡来した人々によりもたらされた中国文化は急速に日本に浸透した。平安時代中期には医学の面でも国風化がはかられた。現存する我が国最古の医学書『医心方』は平安時代に於ける隋・唐医学の集大成であり、全編が先行する多数の中国医書からなっている。この『医心方』の大きな特徴は日本人の手で著されたことであり、本邦の気候風土、民族性などの特殊性を考慮した治療法を選んでいる、また理論的なもの、観念的なもの、繁雑で理解しにくいものは省略しすぐに役立つものを優先して編纂されていること等である。全編30巻からなり、極めて多彩な内容を含んでいるが、当時の著書の特徴の一つとして、中国大家の諸説を紹介するにとどまり、撰者の意見が述べられていないことである。

この『医心方』は今から約1010年前(永観2年、西暦894年)に中国後漢の霊帝の子孫で日本に帰化した阿智王から教えて8世の孫に当たる丹波康頼が撰述したものである。主として隋の『病源候論』によって項目を分類し、その他、隋・唐の方書百数十種類の論を加えている。その内容は病理、病症、薬方、本草、薬性、鍼灸、養生、房中、食餌にいたるまで悉く論じている、類い希な書物である。これには当時の中国医書で残存している『病源候論』『千金方』『外台秘要方』以外の既に失われた逸書遺典の文が収められており、これにより当時の隋・唐医学の真相を窺い知ることのできる貴重な文献となっている。『医心方』は隋・唐の多数の医書を紹介し、当時の医療全体について述べており、現代にまで伝承されていて、この書により我が国の平安時代医学の情勢を知ることができる。